HOKKESHU SHINPOU

平成21年7月1日

法華宗信報

No.129

発行　法華宗宗務院

法華宗ホームページ
www.hokkeshu.or.jp/

皆様に役立つ情報をお届けします

「立正安国論」進覧750年記念法要

「命の尊厳」

宗祖の御教え

かくれ(隠)たる事のあらはれ(顕)たる徳となり候なり。

『崇峻天皇御書』
(定遺一三九一頁)

法華宗教学研究所長
大平　宏龍

《ひとの本当の値うち》

NHKの大河ドラマで、直江兼続が主人公と知って驚きました。一般にはほとんど知られていない武士であるからです。ところが、今は戦国の武将でも、大名の方より、それを支えた名臣とされる人たちが注目され、伊達政宗の家老であった片倉小十郎などは、特に若い女性に人気で、地元ではそれにあやかって町おこしの中心としているそうです。TVニュースの知識ですが、元はといえば「ゲーム」で火がついたとのことで、それで納得がゆきました。

しかし、何事も自己顕示欲の強い人たちが、自分を売りこむことだけを考えているような世相のなかで、黙々と主君や領民の為に尽くした人が脚光をあびるとしたら、それは近頃、大いに愉快なことと言えましょう。世界的金融恐慌の中で、日本の経済を支えてきた中小企業の人たち、中でも他に負けない技術で、誇りたかく生きている人々のことが、新聞の特集となるなども、同様と言えます。

『崇峻天皇御書』は、建治三年(一二七七)、信者の四条金吾頼基への日蓮聖人の御手紙です。曽て真蹟が存在したことが、わかっています。

四条金吾は、主君の江馬

◆信仰日記◆ その道一筋

命を育てる

千葉県長生村
多門寺檀徒
樹木医
海老根　熙さん

私は長年、植木の生産と販売をしてきました。樹木に関わる仕事でありながら、自分の知識は限られた範囲の事しか知らないことに気づき、もっと広い意味での「緑」を学ぼうと一念発起して「樹木医」を目指しました。本当のプロになりたいと五十歳を過ぎてからの挑戦です。

目標を定めて、志したまではよかったのですが、その内容たるや、何とも巾が広くて奥の深さに驚き、時には挫けそうになりました。二週間の缶詰研修の間に十数単位を学び、その上での二次試験は労働者の私にはきついものでした。時には本と睨めっこして、日付が変更してしまう事もしばし、ハシゴに登らなくては成らない時には気合いを入れ直して注意したものです。

入道に法華経の信心をすすめて、きげんをそこね、謹慎中でした。然し、江馬氏が病気となり、四条金吾の医学の知識が必要となって、呼び出されることとなりました。四条金吾の報告を受けた聖人は、直情径行の彼を心配して、ていねいに指導されています。その中で、『主君のおかげで自分の身を養い、法華経への供養ができる。その主君の治療に当っても、得意がることなく慎重な態度で尽くしなさい。人知れず行った善い行為が、外に顕れてその人の徳となるのである。誠意はやがて主君に通じるであろう。然し、日蓮をうらんでいる人もいるから暮々も用心しなさい。』等と言われるのです。

後に、江馬氏は四条金吾に所領三郷を与えるなど信頼がもどりました。聖人の指導の通りとなり、四条金吾も男があがったわけです。

目　次　No.129

❷「宗祖の御教え」
法華宗教学研究所長
大平　宏龍

信仰日記 その道一筋
「命を育てる」
千葉県長生村多門寺檀徒
樹木医 海老根　熙さん

❹【特集】
日弁大正師
第七百御遠忌奉讃Ⅲ
宗務総長
原井　慈鳳

❻ 誰でも分かる
現代に生きている教学
『立正安国論』進覧750年特集
法華宗興隆学林　助教授
株橋　隆真

❽「目で見る法門 2」
ー『立正安国論』の精神ー
原案・文責　日種　崇人
作画　藤村　泰介

❿ 現代の諸問題
「ほとけさまに
みつめられ ❷」
本住寺 住職
日種　崇人

⓮ 新宗会議員の紹介

⓯ 法華宗教化センター
オリジナル布教仏具

⓰「畏れず、怯まず、怖がらず」
菩薩行研究所　所員
矢吹　慈英

表紙写真

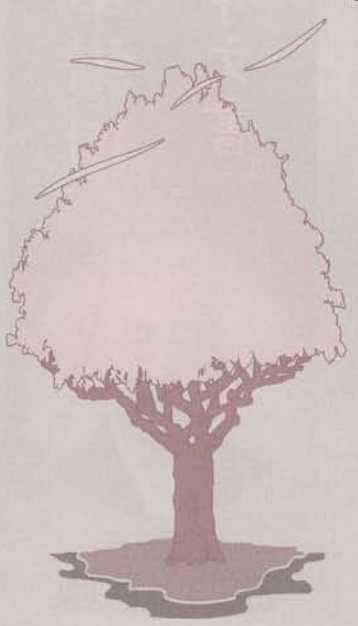
友人夫婦に子供が生まれたと聞き、久しぶりに会いに行った時に撮影させてもらった1コマです。夕方からは盆踊りに出かけるとの事で、女の子は、かわいらしい浴衣を着て、大きなスイカをパパとママと3人で仲良く食べてました。そこには、ただただ優しい空気だけが流れ、幸せな気持ちで友人宅を後にしたのを覚えています。

写真家　小高　雅也

樹木医の仕事はというと「緑の相談者」もしくは「命の相談者」とお考えいただければわかりやすいと思います。範囲は広く天然記念物、森林育樹、公園樹、街路樹、寺社等の古木など多岐にわたりますが、どれをとっても一本も同じ樹木は有りません。生まれ育った土地や水や空気、長い年月の中で変わりゆく環境により、病気に成ってしまったり、虫や鳥の害に遭ったりしながら成長を続けられるものもあれば、止まってしまう樹木も有ります。

この歳にして思うのですが「樹を診る」とは「樹の親になる」ということだと。一つの種から樹苗、育樹、樹木に成る。また人も同じように段階を踏んで優れた大人になる。その時々の的確な対処が求められます。良い環境では良く成長し、悪い環境ではそれなりです。枝を払う時には親木に歯向かうものを切ります。樹勢を高めるには充分な肥料を施しますが、時には、樹を傷つけると沢山の花実をつけます。

樹との関わりは生涯の学習です。「緑の有難さ」を心に「命の大切さ」を人々にお伝えできればと思っております。



特集

日弁大正師 第七百御遠忌奉讃Ⅲ

日弁聖人の足跡を明かす日法聖人の『光長寺文書』

宗務総長
原井　慈鳳

迎え奉る日弁聖人七百御遠忌に向けて大本山鷲山寺に於かれましては様々な事業が推進され、宗門にても日弁聖人御本尊を中心とする調査が行われております。

大きな足跡を各地に残される日弁聖人のご生涯でありますが、鎌倉時代の関連文書の伝来は決して多くはありません。従ってそのご直筆は聖人の実像を拝する上に貴重と申さなければなりません。

今日までの調査で沼津市、大本山光長寺に日弁聖人のご直筆文書が伝来されており、管見にては紙背文書として存在するものを含め消息が四点確認されます。

また私はかつて本門仏立宗、大本山宥清寺に日弁聖人文書が存する事を知り調査の機会を得ましたところ一点は確かに日弁聖人文書、他の一点も日弁聖人文書と伝来されておりましたが、これは正に光長寺同時二祖日法聖人の文書であり、それは日法聖人真跡、光長寺蔵『御法門御聞書下』の中の一部である事を確認いたしました。

その紙背に日弁聖人の御手紙があり、光長寺所蔵のものも宥清寺所蔵の一点も一連のものである事を発表いたしました。光長寺所蔵二点には日弁聖人花押が認められ、宥清寺所蔵の一点にも花押が認められます。

それでは何故日弁聖人のお手紙が光長寺に存在するのか。それは日法聖人の一連の文書を拝しておりますと、他者よりの手紙用紙の裏を利用して、写本や記録を留められる例があるのです。即ち日弁聖人のお手紙の裏を利用して自らの述作をなされたのです。これが伝来され日弁聖人の書状が今日まで大切に保存されていたのです。

宥清寺の日弁聖人書状は「わかみや」から発せられている事が判り年号は記されておりませんが、十一月二日付で翌年二月八日に日法聖人を招請される内容が見えています。

光長寺に伝来される日弁聖人書状にもまた二月八日に日法聖人に面会したい事、御法門をして欲しい旨が記され、この日付は十一月二十五日です。また十二月二日付の日弁聖人文書にも「わかみや」への来訪を再度要請されており、二月の面会を待たれる意が見えます。日法聖人の近隣に変わった事がないのは幸いですが、心配なので三郎四郎に遣わす書状には一般的なことはよいですが、「返すがえす心して」と十分気をつけて下さいと記されているのが注目されるのです。

もう一通には日付はありませんが十二月二日付の事に言及した部分が見え前記の他のお手紙の一部かも知れません。

これらの書状は一連のものである事が確実で、三郎四郎という人物を通じて何回も情報交換をしている事は明らかです。

『日弁聖人御消息』大本山光長寺蔵

岡宮の日法聖人に駿河の状勢を尋ねる内容から想像されますのは、正に弘安二年（一二七九）九月に発生した法華宗信徒弾圧の熱原法難の一件であります。宗祖は日興、日弁、日秀師を指導して『龍泉寺之申状』を早馬にて鎌倉へ届けさせました。この時、既に遅く熱原の信徒二十名は投獄されてしまいました。

宗祖は無慈悲な問注所の裁定に対して日興・日弁・日秀師らに徹底抗弁せよと厳しく指導しておられます。日弁・日秀の両師は龍泉寺に復職もできず身延に呼び寄せられました。同年十一月二十五日、宗祖は『富城殿女房尼御前御書』に記されるように日頂師の母と云われる富木尼（妙常）のもと八幡庄若宮（わかみや）の地に日頂師の随行として日弁・日秀両師をつけて送られたのでありましょう。

宗祖は日弁・日秀の両師を不当な問注から匿うためであったと考えられますが、御遺文で知られる賢女の富木尼・厳しい性格の富木師に日弁・日秀両師をよろしく取次ぐよう述べておられます。弘安二年の歳の暮れのことです。

鎌倉の建治年代から弘安初年の宗祖と直弟による駿河・甲斐の布教活動は目ざましいものがあり、岡宮に住した天台宗の僧、空存が日春聖人となられ、勝沼（休足）胎蔵寺の僧、宥範が日乗聖人となられ、各々光長寺・立正寺の基礎となりました。

翌、弘安三年（一二八〇）四月、熱原神四郎ら三人が処刑され、残る十七人は追放となりました。この事件の余韻覚めやらぬ十一月十四日は鎌倉の鶴岡八幡宮の寶殿が炎上する事件が起きているのです。

注目すべきは一連の光長寺・宥清寺蔵、日弁聖人書状の係年です。何時のお手紙かということです。

日弁聖人の書状の内容を拝すれば「わかみや」の地に在住中であり、「越へ久しく」と少々の月日を経ている事、まだ辺りに不穏な空気が漂っている事、駿河に居られたと拝される日法聖人に情報や来訪を求めている事。

即ちこの一連の書状は弘安三年の秋から暮れにかけてのものと試考いたします。日法聖人との頻繁な書状の往復には日法聖人と接近する事実と内容が拝され、逆にこの時期、既に日弁・日興両師の距離は離れていく時期かと拝されます。日秀師は日興師に付き富士派を形成してゆきますが、岡宮光長寺日法聖人は飽くまで宗祖に忠実に学んでおられた事が光長寺文書に拝されるのです。

日弁聖人、日法聖人はお互いの御心に共に大きく存在していた事が私には拝されるのです。

合掌

誰でも分かる現代に生きている教学

『立正安国論』進覧七五〇年特集

『立正』と『安国』―我々法華宗徒にとっての『立正』と『安国』とは何か―

法華宗興隆学林 助教授
株橋　隆真

（一）

今年、『立正安国論』（以下、『安国論』と略称）の進覧七五〇年を迎え、日蓮門下各宗に於いて、研究会・勉強会等が盛んに行われ、改めて『安国論』の意味内容を学び、宗祖日蓮大聖人の「立正安国」の真義を問おうとする気運が高まりつつある。『安国論』を現代に如何に読むかは法華宗徒にとっても真剣に考えなくてはならない重要な課題であろう。そこに述べられる「立正」や「安国」とは我々にとって何たるか、それを日常生活や社会に如何に受容し活かせていくか等ということを、極めて現実的な問題として考えてみたいと思う。

（二）

曾てあの阪神淡路大震災の折、一月の末に法華宗青年僧の有志が神戸に集合し、托鉢を行ったことがあった。ある神戸の寺院に集合し身支度を調えて、被災地を歩く注意や心構えを確認していたその時、救援物資を持たず、ただ「南無妙法蓮華経」を唱えて回るだけで良いのか、という問題が持ち上がった。聞けば、神戸中にいろんな宗教団体が集まり、被災者のために物資やボランティア活動による救援を行っているということであった。皆それを聞いて、先程までの意気込みが削がれ、静まりかえってしまった。その時、当日の様子を同行取材するため来ていたカメラマンが意見を言うために声を上げた。「今日の皆さんの目的は何でしょうか。物資やボランティアによる救援活動は、あなた方お坊さんでなくても出来るはずです。お坊さんにしかできない行動をするべきではないでしょうか」

この意見に背中を押され、皆、意を強くして街中へと出て行った。「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経」と唱えて回る中で、特に被害の大きかった地域に差し掛かった。町全体が焼け野原、辺り一面どこに何があったかも解らない状況で、俄には現実のものとは思えなかったが、『安国論』が書かれた背景はこれをも凌ぐ惨々たる状態であったことは想像に難くない。ふと見ると、木片に「ここで両親と子供が亡くなりました。三十年間お世話になりました」と書かれていたのに気付き、思わず足を止め読経を始めた。見れば周りには同様のメッセージがいくつも残されており、皆それぞれ散らばって、読経唱題を始めた。残されていた言葉には今を以てしても、胸の詰まる想いであるが、青年僧達は真剣に心を込めて供養のために一心に「南無妙法蓮華経」を繰り返し繰り返し唱

え続けた。そんな中、道行く人が「ありがとうございます。心ばかりですが納めて下さい」と涙ながらにお布施を差し出された。被災者に違いない人から受け取るべきかどうか躊躇したが、真心を頂戴し、後日、義援金にさせて頂いた。

一日を終え、件のカメラマンが「今日は皆さんお坊さん達の真の姿を見せてもらいました。これこそお坊さんにしかできない良いボランティアでしたね」と我々を評してくれた。

世間は我々に何を期待しているのか、それを身をもって感じ、つくづく考えさせられた貴重な体験でもあった。

(三)

「お題目を唱えるだけで良いのか」最近よく耳にする言葉である。その殆どが日蓮門下の僧侶方からのものであり、真意の程はわからないにしても、聞いた瞬間、驚かされる発言である。恐らくは自らの人格を磨くことなく、何の見識を持つ努力もしないで、只々「南無妙法蓮華経」と唱えるだけで良いのだろうか、という意味であろう。現実に知り合いの僧侶も法務よりも社会活動やボランティアに専念することに意義を見出している人もいるし、最近の報道で、仏壇や御宝前に向かってお経を読むだけで良いのか、それより世間に向かって何かをしなければならないのでは、と悩んでいる各宗派の若い僧侶が増えていることを知った。一見結構なことのようにも思えるが、果たしてそうなのだろうか。

この問題意識はすでに宗祖当時からあって「問う、題目ばかりを唱うる証文これありや。答えて曰く、妙法蓮華経の第八に曰く、法華の名を受持せん者、福量るべからず」とご指摘があるように度々取り上げられている。しかし御題目の功徳は計り知れず、これを受持すれば「妙法蓮華経の五字またかくのごとし。一切九界の衆生並に仏界を納めたり。十界を納めれば亦十界の依報の国土を収む」と、自身も他の者も国土までもその功徳に収まるという、これらに対する解答を法華経から導き出されている。

(四)

仏教の目的は正報(衆生)と依報(環境・国土)の成仏であって、我々生きとし生ける者すべての存在と、その拠り所となる国土の双方の安穏が円満に成り立つことである。そのためには、正しい仏法の建立＝「立正」が不可欠であり、それがなければ安穏な世界＝「安国」は成立しない。宗祖は「真実に円の行に順じて常に口ずさみにすべき事は南無妙法蓮華経なり」と唱題の最も肝心なことを訴えられて「南無妙法蓮華経」を聞(聞き)・信(信じ)・口唱(唱える)することが「立正安国」の要因となる修行であるとされる。従って法華宗徒、引いては仏教徒はその教えを信じて実行することに尽きると言えるのではないだろうか。「仏道に入る根本は信をもて本とす」と御指南があるように、「南無妙法蓮華経」の口唱という信心に基づく真実の修行なくして、他の方便の修行に向かうのは、宗祖の教えにも背き「立正安国」からもかけ離れていくことに他ならない。

「正直に方便を捨て」て、「実乗の一善」たる「南無妙法蓮華経」の聞・信・口唱に励み(＝立正)、すべての存在の平安(＝安国)を目指さなければならない。この「南無妙法蓮華経」の経力こそ、社会・世界をより良くしてゆく唯一根本の原動力であることに、いち早く気付かなければならないのである。

現代の諸問題

ほとけさまにみつめられ ❷

本住寺 住職　日種　崇人

☆映画「おくりびと」が世界の人々に認められました。異文化である一神教（ユダヤ・キリスト・イスラム）文化の人々が、亡き人をおくる日本人の生死観を表した「日本人のこころ」を「すばらしい」と評価したのです。縁深き亡き人に手を合わせ、その人の向かうところがいいところ（善処）であることを願う、残された者の心情が通じたものと思えます。死別の悲しみは世界共通の感情でしょうから。

☆ただ一神教と違うのは、「神」「仏」に手を合わせるのではなく、私たち日本人は「亡き人」を対象として合掌するのです。もっと言うならば、亡き人の「霊」に対して話しかけ、想いを伝えているのです。「おばあちゃん、おじいちゃんの待つところへ向かってくださいね。供養しますから」と。唯一の「神」「仏」を拝むのではなく、縁ある霊に対し、「ほとけ」になってもらいたい追善のきもちを供養という形にあらわして手を合わせてきたのです。

☆明治6年の暦改訂まで、私たち日本人の先祖は「月」を頼りとする暦で生活をしていました。月の満ち欠け（朔望）、新月（朔日）から新月までの30日の周期をひと月としていたのです。ですから15日は、1月2月…6月7月…11月12月いつも夜空には満（望）月が輝いていたのです。そして一年の半ば7月15日（中元）の満月を見上げながらこころが奮い立つ思いを行動に移しました。中元の満月あたりに先祖の霊がかえってくるのだと、7月7日（七夕）から先祖を迎え入れる準備をし、13日に迎え入れ、クライマックスの満月の15日、先祖の霊が舞い戻ったことを喜び、先祖の霊といっしょにいるんだという感情をからだで表現しました。「ぼんおどり」です。「ぼんおどり」とは日本人の死生観が表れた行為なのです。

☆以上が日本の「おぼん」です。迎え火があり、送り火があり、精霊棚があり、初盆があり…。先祖の霊を強く意識する期間が「おぼん」なのです。現代の8月15日[※1]は満（望）月とは限りませんし、七夕とも大きく隔離してしまいました。暦の改訂は日本人のこころをも改変してしまう要因の一つとなりそうです。

☆仏教行事に「盂蘭盆会」があります。日本でも古来より修行されていた法要のようです。この「盂蘭盆会」は7月15日と決まっています。『盂蘭盆経』というお経に「十方の僧たちが七月十五日に研修合宿の最終日を迎える。その時、七世の父母と現在の父母で災難に苦しんでいる者のために、百味の食事と四種の果実とを盆器に汲みそそぎ…十方の大徳の僧たちに供養しなさい」というお釈迦さまの教えがあるからです。7月15日の自恣日にサンガ（僧侶）への布施供養する功徳によって七世の父母を救うことができると説かれているのです。

☆7月15日の供養の対象が「サンガ」から「死者の霊」へと変化していくのが日本仏教における「盂蘭盆会」の特徴となっています。そこには日本人の死生観が大きく関連していることは明白で、日本人のこころが「盂蘭盆会」を「おぼん」と改良したと言えるのです。亡くなった人の霊魂を浄化させる手段として「ほとけになる」（成仏）という仏教思想が取り込まれたのです。自然豊かな風土を背景とした日本独特の生死観と文化を、渡来宗教の仏教は寛容に受け入れ、霊魂の存在を認め、先祖の霊とともに生きるという大衆のこころに応えようとしたのです。だからこそ、今日まで日本仏教という宗教が存続しているのだと思うのですが…。けっして教義仏教の浸透ではないと考えています。

☆平安中期の『蜻蛉日記』には「七月十日過ぎになる。世間では

※1：1ヶ月遅れのおぼん　※2：『暮らしの中の民俗学2』参照　※3：（http://www.prati.info/main.html）広報紙『サンガ』内＞お盆　※4：（http://www2.big.or.jp/~yba/index.html）浄土真宗やっとかめ通信

盆(ぼに)の準備に大騒ぎしている。これが例年であれば、盆の供え物はあの人の政所(家政事務所)で用意してくれるのだけれど、今年はもう期待できないだろうと思い、ああ亡き母上も悲しく思うであろう…」と自分の亡母への盆供養のことを心配していますし、平安後期の『今昔物語』での「今は昔、七月十五日の盂蘭盆会の日のこと。一人の若い女がいた。亡くなった親のために盂蘭盆の供養をと思うのだが、食物をお供えすることも貧しいゆえにままならない。そこで仕方なく……」とは、亡き親の霊に盆の供養をするという庶民信仰があったことがわかる一文です。鎌倉期の『吾妻鏡』には、盂蘭盆会が最近に亡くなった近親縁者への供養だけでなく、戦死者への慰霊の供養であることがわかる記述もあります。室町期には、お盆の墓参りや我が家での盂蘭盆講が行われるようになっていき、江戸期のはじめには、精霊の迎えと送りが一般化し、江戸中期には迎え火・送り火、盆提灯、盆棚、茄子・キュウリの牛馬、ぼんおどりといった現代伝承の「おぼん」が確立しているのです。[※2]

☆ネット上の「浄土真宗のお盆観」という項目に、「浄土真宗は霊魂不説の教えであり…お盆を迎えるのは亡き先祖の霊を救うという供養のためではありません」[※3]とか、「霊魂というわけの分からないものが空を飛んで我が家へ帰ってくるのではありません」[※4]とあります。さきに述べた日本人のこころの象徴である「おぼん」の否定です。おどろきの文章です。さらに浄土真宗の檀信徒向け啓蒙書[※5]を数冊ひもといてみますと、もっとおどろきます。先祖より伝承してきた「人をおくる」行事・しきたりを徹底的に真宗教義から否定してあるのです。つまり、霊魂不説ですから「人をおくる」行事は無用と解説してあります。たとえば枕経は、「遺体を礼拝の対象とはしません云々」と。「枕経は本尊に対しておこなう云々」のだから遺体に背を向けての礼拝となるわけで…この姿は法華の僧侶からすると絶対認めることのできないというか驚愕です。そこにある「慣習と宗教は違う!」として日本のこころ(慣習)をことごとく排斥してある文章の数々。一例を挙げるなら、「浄土真宗では使わないことば」として「ご霊前」・「故人の霊」・「祈る」・「魂」・「廻向」・「引導を渡す」・「追善供養」・「冥土の旅立つ」・「永眠する」・「冥福を祈る」・「草葉の陰で」等々と。

☆日蓮大聖人の『盂蘭盆御書』というお手紙文には、「盂蘭盆会」のいわれが詳しく説明され、日蓮大聖人の日本風土慣習に根付いた日本仏教観を学ぶことができます。

☆『盂蘭盆御書』にある有名な一文に、「目連尊者が、法華経を信じまいらせし大善は、我が身仏になるのみならず、父母仏になり給う。上七代下七代、上無量生下無量生の父母等存外に仏となり給う。乃至子息・夫妻・所従・檀那・無量衆生三悪道をはなるゝのみならず、皆初住・妙覚の仏となりぬ」。

☆今ここに「南無妙法蓮華経」と唱えることは、唱える自分が「ほとけになる」だけではなく、父母等の遠い先祖が、子供・孫たちの子孫が、「ほとけとなり」、霊山浄土という後生善処で再会できるのだと。

☆「我が身がほとけになる」ことは仏教本来の根本思想です。しかしながら「のみならず」とは?。今の自分の唱題が自分の先祖の「成仏」をも確定するというお教えがここにあるのです。この点をじっくり考えてみてください。インド仏教には存在しない日本仏教思想です。

☆日蓮大聖人のご遺文には、現代の浄土真宗が禁じている概念に反し、「聖霊に回向」[※6]・「故聖霊いかに草のかげにて喜びおぼすらん」[※7]・「閻魔大王等にも申させ給べし」[※8]等々、「人を送る」大切さ、そして送った先祖霊と共に生きることの意義を綿綿と後世に伝えてきた日本人のこころを汲み取られたお言葉が多くあるのです。

☆「おぼん」の先祖への回向供養は、「南無妙法蓮華経」と唱えるほかはないのです。

※5:『よくわかる仏事の本 浄土真宗』『親鸞と浄土真宗 知れば知るほど』『目からウロコの親鸞聖人と浄土真宗』 ※6:『法蓮抄』(曾存) ※7:『上野殿御返事』(興師本) ※8:『南條兵衛七郎殿御書』(真跡)

新宗会議員の紹介

平成21年4月1日に就任された、宗会議員をご紹介いたします。

北海道教区

北海道 日源寺　若林　弘基

今期選出され3期目を迎えました。今まで2期の経験を生かし、微力ながらも宗門の発展に寄与いたしたく、そして次代の若者達に確かに渡したく努力いたします。

東北教区

秋田県 信隆寺　土田　隆英

教区の代表として宗門の立法機関である宗会議員に選出されました。宗門・教区の発展興隆の為に今、何が自分に出来るのかを確認して、努力、精進していきたいと思っています。何卒宜しくお願いします。

東京教区

東京都 妙壽寺　三吉　廣明

興学布教という先師の言葉があります。興学とは、現代に正法をいかに伝え、布教とはこれをいかに運動していくことかと思います。選出いただいた代議員として、宗会において微力ながらその役割を果たしてまいりたく存じます。

東海教区

静岡県 浄泉寺　鏡　東学

今期より教区選出の宗会議員を務めさせていただく事となりました。不徳浅学の身で重責を負うこととなり、身の引きしまる思いです。各上人方の御指導・御協力を賜りながら精進したいと思っております。よろしく御願い申し上げます。

大阪教区

大阪府 常行寺　富岡　諦昭

現在の閉塞感のある世の中にこそ壽命無量の信仰の力で、永遠に生き続ける命を大切に、南無妙法蓮華経の功徳が親から子、子から孫へと伝わる施策を、微力ながら宗門興隆の為、努力致す所存でございます。

兵庫教区

兵庫県 感應寺　金井　孝顕

この度、兵庫教区より再選されました金井孝顕です。前任者の残任期間を含めて6年目になります。前年、宗法・宗制・宗規・諸規定が改正されました。原井宗務総長台下に協力して、微力ながら宗門のため全力を尽くします。

淡路教区

兵庫県 本妙寺　山本　恵彦

2期目を務めさせていただく事となりました。最近「CHANGE」という言葉の人気に社会の変化はめまぐるしく、不透明な事も否めません。議員として社会や時代の変化に慎重に対応すべく精進して行きたいと思っております。

四国教区

徳島県 妙法寺　佐々木　明乗

現代社会の混迷と不安定な情勢は、人々の宗教心の欠如を招いています。宗祖の教えの原点に立ち返り、僧俗一体となって護法愛宗のために修行精進する布教活動の実践が大事と考え、尽力して参りたいと思っております。

九州教区

宮崎県 妙経寺　詠田　日守

教区の推薦を頂き責任の重大さを感じています。今の社会世相を見ると自己主義者が多く、絆がなく環境破壊にもつながっているような気が致し、また毎日のように事件が起こり報道され、大変な社会になっていかに菩薩行が必要かを感じています。

光長寺選出

静岡県 山本坊　久保木　学洋

立正安国論進覧750年の聖年に當(あた)り、宗祖の原点に帰り、四海帰妙(かいきみょう)の誓願に向かって僧侶として、全てのものに感謝する心を持って至心にお題目を唱え、お経を上げる事が大切に思います。宜しくお願いします。

鷲山寺選出

千葉県 不動寺　小山　孝正

不徳浅学の身がご本山の推挙を受け、責任の重さを感じております。ご貫首猊下・門末上人方の御指導のもと、しっかりと勉強し、御本山・宗門の為、努力精進を致してまいります。よろしくお願い申し上げます。

本能寺選出

鹿児島県 蓮隆寺　青木　日政

大本山本能寺選出の宗会議員として、宗門当局に信仰中心の御本山の意向を充分伝達すると共に、宗会議員としてどんな些細な事でも宗門の為に成る事であれば宗門当局に伝達し職務を遂行したいと思っています。

本興寺選出

兵庫県 本成院　清水　常光

大本山本興寺選出議員として2期目となりました。平成25年にお迎えする、御開山日隆聖人550遠忌法要に向かい、本山の立場で御遠忌の意義を宗門にお伝え出来ればと考えております。何卒宜しくお願い申し上げます。

新宗会議員の紹介

議長　京都教区

京都府 信正寺　**中山　孝明**

現代、環境問題が大きくクローズアップされている。これを無視すると、やがて人類の滅亡、地球破壊につながる。他方、心の環境問題がある。人間はどうなろうとしているのか、社会をどう構築して行くのか。この問題に取り組めたなら……。

副議長　中国教区

岡山県 松壽寺　**菊地　恵祐**

お題目のもとに、宗祖門祖の教えに従い、信仰の心を礎に、時の流れを読み取って、温故知新を感じつつ、世界平和実現のために、今法華宗が僧俗一体と成って何をすべきか、議会の一員として発議実行すべく最善を尽くしたいと考えています。

法務委員長　千葉教区

千葉県 本興寺　**平田　義範**

2期目の責任の重さを痛感しております。本年度は、『立正安国論』進覧750年の聖年であり、各御本山は御開山・御開基上人の御遠忌奉讃事業を目指す大切な年、私共も異体同心で宗門興隆のために尽力して行きたいと思います。

財務委員長　北陸教区

石川県 宣龍寺　**中村　日珠**

昨秋の臨時宗会で成立した新法の宗法や大改正された宗制・宗規・諸規程が円滑に運用されているか、不備はなかったかなどを、注意深くチェックしていくのも、私たち議員の使命の一つと思い、微力ながら力を尽くしたいと思います。

『立正安国論』進覧750年誓願の集い

今日の『立正安国論』を求め、発信すべく、お題目の真の下種とは何か。人々の心に訴えたいと思います。

日時

平成21年7月2日(木) 午後2時より

会場

法華宗「獅子吼会」本堂

東京都新宿区中井2-14-1　TEL.03-3953-5501

交通：西武新宿線「中井駅」下車、徒歩5分

大導師　法華宗管長 大本山 鷲山寺　大塚 日正 猊下

御臨席

大本山 光長寺　石田 日信 猊下

大本山 本能寺　岡本 日亘 猊下

大本山 本興寺　有原 日龍 猊下

法華宗宗務総長　原井 慈鳳 台下

○僧侶および檀信徒は、随喜参拝（自由参加）でお願い致します。

○当日の会費は、僧侶10,000円、檀信徒3,000円です。

○慶讃法要・記念法話終了後、奉納清興を行います。

○参加申し込み、および問い合わせは「法華宗宗務院」まで。

◎法華宗宗務院　〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町2-19-1　TEL.03-5614-3055　FAX.03-5614-3056

法華宗教化センターオリジナル布教仏具

NEW 過去帳台 匠の一品！

洋風仏壇にも調和するデザインと各頁が
乱れることのない押さえを新しく採用！

■頒布冥加料（送荷料込み）

6寸用 **6,500円**
（幅20cm×高さ25cm×奥行10cm）

4寸用
4.5寸用 **6,000円**
（幅15cm×高さ20cm×奥行6cm）

黒色（くろ）
朱色（しゅ）
溜色（ため）

定番 ミニ仏壇

いつでも、どこでも、
即是道場！

■頒布冥加料
（送荷料込み）
15,000円
（幅17cm×高さ30cm×奥行14cm）

好評 過去帳

毎日の
先祖供養に

6寸 **3,500円**
4.5寸 **2,500円**
4寸 **2,300円**

■頒布冥加料
（送荷料込み）

NEW 写経御手本集

仏さまの心を
一筆一筆
菩薩行！

セット内容

◆写経の心得	1枚
◆写経手本各1枚 方便品・寿量品・神力品	計3枚
◆薄墨練習用紙3種各2枚	計6枚
◆清書用紙3種各2枚	計6枚
	合計16枚

限定2,000部 お早めに！

■頒布冥加料
（送荷料別） **1,500円**

法華宗教化センター

〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町2-19-1

お問い合わせ・ご注文は
TEL.03-5614-3055
FAX.03-5614-3056

「畏れず、怯まず、怖がらず」

菩薩行研究所　所員
矢吹　慈英

「菩薩行研究所は何をしているんだ」という声を聞きました。眼を大きく見開いて見てください。一生懸命頑張っている姿が見えませんか、と問い返したい。

菩薩行研究所は、「法華宗宗祖・開基・先師聖人報恩奉讃会」五大事業（①法華宗法規全般の再整備、②先師聖人の研究、③『法華宗全書』の刊行、④機関誌『無上道』の改革、⑤菩薩行研究所の実践）のひとつとして、平成19年設立しました。その目的は、本宗の教義の現代的意義を解明し、時代に適応する菩薩行の実践（信心・奉仕・布施）に寄与することで、対社会に向かっての調査研究および実践活動をしています。

特に本年は、来る7月に迎え奉る宗祖日蓮大聖人『立正安国論』進覧750年に合わせて「安国論・日めくりカレンダー」を制作中です。鎌倉当時の問答体の漢文を和訳・英訳をもって現代風に解りやすくアレンジし、宗祖の御心を体して法華の正法を平成の世に弘通する教材として提供いたします。また直轄機関であるホームページ委員会の諸師の努力によって「法華宗HP」が改善され、外に向かってキメ細やかに発信する布教教化の新法器として生まれ変わろうとしています。さらには、今秋「所報」も発刊される予定です。乞うご期待。

「菩薩行」とは、他者の命を救うために慈悲の心をもって努力精進し続けることです。畏れず、怯まず、怖がらず、菩薩行研究所は所員一同「異体同心」の御旗のもと、法華経経文「不惜身命」「死身弘法」のごとく広宣流布の気概を抱いて邁進しています。

本紙読者、諸兄諸姉の忌憚のないご意見をお寄せ下さい。

法華宗本門流　検索

www.hokkeshu.or.jp/

編集後記

『立正安国論』進覧750年の聖年をお迎えしました。日蓮大聖人の数有る著述の中で、時の国家勢力者に対して法華経の功徳をお説きになられ、南無妙法蓮華経を弘通なさいました。

いま、法華宗の僧俗が一体となり行うべき事は「菩薩行の実践」であり、目指すは「一天四海皆帰妙法」であります。改めて、心を一つにして共に、お題目を弘める日々をおくりましょう。

編集長　佐藤 正純

法華宗信報
No.129

平成21年7月1日発行　発行人／原井 慈鳳　編集人／佐藤 正純
編集部／〒299-4341 千葉県長生郡長生村宮成373-1 清巻寺内 TEL.0475-32-0402
発行所／〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町2-19-1 法華宗宗務院 TEL.03-5614-3055　印刷所／株式会社マックス